

# ママと“キドー”の はちゃめちゃ逃避行



イラスト=上坂じゅりこ



## ある母娘の人生を 垣間見る

逃避行。どうなるか分からないが、とにかく現状を打破する強硬手段であり、さらに誰かと一緒にそれはないより甘美なものだろう。生活を手放し、新たな生活を得る。その希望を求める時間が、たとえ長すぎる人生の一部だとしても、あったという事実だけで糧になるのかもしれない。

児童施設で暮らすルーの元に、ハリウッドで暮らしていると聞いていた母・カリナが会いにくる

と電話が入る。徐々に実感が湧いてきたのか、思わず走り出したり、当日の朝はソワソワしながら歯磨きしたり、嬉しさが溢れちゃうルーがかわいらしい。再会したママの車に乗り込んだルー。ちょっとしたドライブのつもりであったがあれよあれよと施設を離れ、ついにはオランダからポーランドのおばあちゃんの家に向かうことになる。CDが取り出せなくなって「グサイ」曲しか流れないオンボロのスポーツカーで、「これは誘拐なの」と堂々と言うカリナはアメリカカンニューシネマさながら。映画から出てきたような過激で破天荒なママは、小さくもないがまだ子どもである十一歳のルーにとつて次第に憧れになる。「私たちはポニーとクライドだ」と指で作った銃を撃ち、モーター車を冒険したり、食い逃げしたり、さらにはカーチェイスまで。ポニーとクライドごっこはそれはそれで微笑ましいが、役を降りてルーがカリナをママと呼ぶときは切実なのに胸が高鳴る。一方カリナはルーをキドーお嬢ちゃんと呼び続けるところを見ると、自分が娘にしてあげられなかったことの自責の念があるのかなと思わずにはいられ



ない。キドーという呼び方には、ルーと一緒にいたくてもそれが難しかった葛藤と、古い映画を愛するカリナらしさが詰まっている。エンストした車をカリナが外から押し、ルーがアクセルを踏み動き出した拍子に叫んだ「ママ」に対する「お待たせ、キドー」が私は一番好きでした。

逃避行はわずか数日で終わるが、今後ふとしたときに二人はこの出来事を思い出すのだろう。気が変になりそうになれば叫ぶし、探していないときに探し物は見つかり、「もう一人じゃない」というルー

の言葉をカリナは宝物にするだろう。お互いの癖や習慣、もらった言葉がこんなにも愛おしいなら、自分の「普通」じゃない部分も矯正しないで大切に守っておこうと思える。

子どもが映画に登場するとき、どうしても彼らは成長する。あらゆる影響や刺激にすら、子どもは少しずつ何かを獲得していく。『KIDOO キドー』のルーは何を体感し、どんな選択をするのか。また大人も、子どもと実際に接してみても手探りで学ぶことはたくさんある。カリナはどうルーを大切にする方法を見つめるのか。是非二人の母娘を見守りに川越スカラ座へお越しください！

文・ミムラ

### ◆川越スカラ座

明治38年に寄席としてスタートした川越老舗の映画館。平成19年に惜しまれながら閉館したが、その後NPO法人プレイグラウンドの尽力により復活。コアな作品を懐かしい雰囲気のある館内で堪能できる。

川越市元町1-1-1  
049-223-0733 火曜・水曜休館（祝日の場合は営業、翌平日に休館）  
【料金】 一般/1,700円 シニア/1,300円  
障がい者の方（および付添1名まで）/1,000円  
25歳以下の方/1,000円 高校生/500円  
幼児/無料  
※詳細はHP参照。http://k-scalaza.com/

「KIDOO キドー」2025年5月10日～23日 上映予定